

# キコニアレター

(「コウノトリ通信」改め)

2015.2.15 発行

No.4



## 50年ぶりのヒナ誕生 再びコウノトリが舞う福井県を目指し

福井県安全環境部自然環境課  
自然環境保全グループ  
主査 中屋 健史



写真提供 高橋 繁応さん(福井県)

福井県では、かつて兵庫県とともに野外でコウノトリが営巢していました。しかし、次第に生息数が減り、昭和41年に本県からは姿を消しました。昭和45年12月、大陸から1羽のコウノトリが越前市(旧武生市)に飛来しましたが、日に日に衰弱したため、兵庫県立コウノトリの郷公園に移送しました。のちに、「武生(たけふ)」と呼ばれたこのコウノトリは、1羽の娘「紫」をもうけました。現在では「紫」の子が放鳥され、野外で生息しています。

本県はコウノトリを自然再生のシンボルと位置づけ、自然環境の保全・再生のため、平成23年12月、野外での定着を目指し、県立コウノトリの郷公園と共同研究を開始しました。同園から2羽のコウノトリを借受け、飼育・繁殖事業に取り組みましたが、平成25・26年の産卵は無精卵であったため、他ペアの有精卵を譲り受け、抱卵させる手法により、平成26年6月、3羽のヒナが誕生しました。

これは、昭和39年に小浜市で最後のヒナが確認されて以来、本県では50年ぶりの誕生となりました。初めは弱々しかかったヒナも健やかに成長しています。3羽の幼鳥の愛称を募集したところ、県内外から202点の応募があり「げんきくん、ゆうきくん、ゆめちゃん」と名づけました。

飼育を行う越前市白山地区では、地元ボランティアのコウノトリ見守り隊が毎日飼育ケージの見守りを行っています。また、コウノトリの野外定着を目指し、水田魚道や退避溝の整備、冬水田んぼの実践、また、無農薬・無化学肥料による「コウノトリ呼び戻す農法米」を生産しています。さらに、郷公園と福井県の共同研究として、豊岡市と越前市白山地区において餌環境に関する研究も進めています。再びコウノトリが大空を舞う福井県を目指し、自然環境の保全・再生活動を一層推進していきたいと考えています。

### コウノトリの個体数 (2015.1.21 時点)

#### 1 飼育コウノトリの個体数

施設・拠点名	オス	メス	不明	計
県立コウノトリの郷公園	28	33	0	61
附属飼育施設コウノトリ保護増殖センター	15	15	0	30
養父市八鹿町伊佐地区放鳥拠点	1	1	0	2
朝来市山東町三保地区放鳥拠点	1	1	0	2
計	45	50	0	95

#### 2 野外コウノトリの個体数

カテゴリー	オス	メス	計
リリース	9	10	19
野外巣立ち	22	30	52
野生	0	1	1
計	31	41	72

# 人とつなぐ

—コウノトリの郷公園ソシオ研究部の取組—

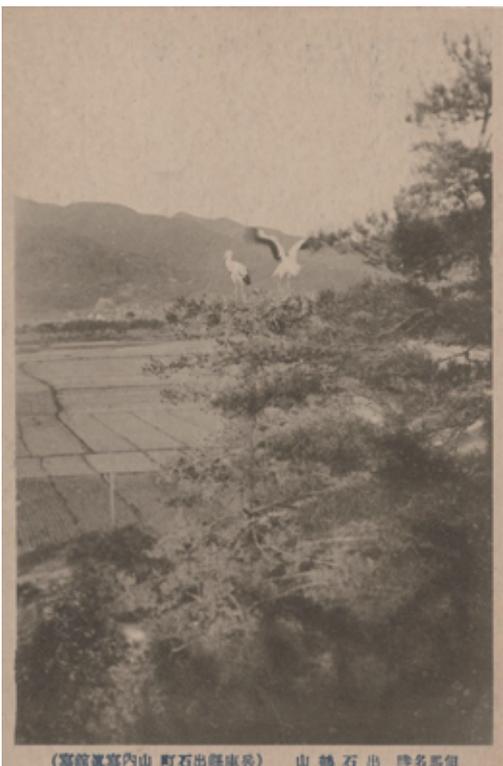


兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科教授  
兵庫県立コウノトリの郷公園ソシオ研究部長  
中井 淳史

# 人をつなぐ

ソシオ研究部は、平成26年4月に兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科の開設とともに設置されました。ソシオ研究部といっても、いったい何をやるのか、いぶかしく思われる方もあるかもしれません。一言でいうならば、コウノトリやジオパークといった豊かな自然環境とヒトをつなぐこと、そして、現在や未来の社会にこれらを活かすために人と人をつなぐことと考えます。

コウノトリやジオパークは、それ自体自然界の中で確固として存在していますが、あの鳥をコウノトリと、あの柱状節理を玄武洞と呼ぶのはほかならぬ人間です。人間から眼差しが向けられた結果として、これらは名前を得るのです。この眼差しとは、つまるところ、何らかの価値をそこに見出そうとする人間の「欲望」にほかなりません。社会の変動によってその「欲望」は変化しますし、結果として自然環境に対する価値観も変動するのです。



(寫眞眞宮内山 町石出録車兵) 山 鶴 石 出 録 名 馬 銀  
出石鶴山(大正~昭和初期の絵葉書より)



(寫眞眞宮内山 町石出録車兵) 山 鶴 石 出 録 名 馬 銀  
出石鶴山の茶店(大正~昭和初期の絵葉書より)

コウノトリの事例を見てみましょう。江戸時代にご禁制のツルを捕まえて食べた(当時、ツルの吸い物は武家儀礼の場で供される料理でした)とある不良旗本が、コウノトリだと言い張って罪を逃れたという話(大八木醇堂『醇堂叢稿』)があるように、昔の人々にとって、コウノトリとツルの区別はさほどはっきりしていなかったようです。このことは、豊岡市出石町にあったコウノトリ繁殖地が「鶴山」と呼ばれていたことから分かります。日露戦争の始まった明治37(1904)年ごろ、コウノトリが営巣を始めると勝利の「瑞兆」として珍重され、周囲に茶店や展望所ができて観光地となりました。大正10年、鶴山全体が天然記念物<sup>\*</sup>に指定されるまでになりました。

しかしながら、一方でコウノトリは田畑を荒らす悪い鳥、私たちの生活に害をなす存在として、駆除すべき対象でもありました。乱獲や農法の変化など複合的な要因の結果、

## 知ろう! 学ぼう! 郷公園!

### コウノトリQ&A

-船越主任飼育員に  
聞いてみました!-

Q | コウノトリは「寒さ」を感じるのですか?

A | もちろん感じています。寒い日には、胸の羽をふくらませ、くちばしをうずめて、体温が奪われるのを防いでいます。

また、「換羽(かんう)」という羽の生えかわりが10月ごろには終了し、今は羽の量が多く、ふんわりとしています。さらに、足は動脈と静脈が複雑にからみ合って熱交換を行い、体温が奪われないような仕組みにもなっています。

Q | 雪が降る日は、どのように暮らしていますか?

A | 暖かい日と比べて活動量が減少します。雪を避けるために木陰に入るようなことはせず、立ったまま過

# 豊岡杞柳細工

逆境から生まれた伝統の技



豊岡の六方田んぼで「巻き簾(す)を立てたようなものを見かけました。これは何なのでしょう。」

それは豊岡名産 杞柳(きりゅう)細工の材料「コリヤナギ」を束にして、冬ごもりをさせている姿です。

豊岡盆地を流れる円山川は河川の勾配が極めて小さく、大雨のたびに洪水を引き起こしました。しかし、そのような環境がコリヤナギには適しており、かつては川岸に繁茂していました。

そんなコリヤナギを利用し、かごを編むようになったのが、杞柳細工の始まりです。その歴史は古く、奈良の正倉院にも但馬の国で作られた「柳箱」が10数点納められています。

コリヤナギで作った製品は、軽くて丈夫な上、もう一つの素晴らしい特長があります。それは、湿気を吸収することで、気密性が高まることです。飛脚は大切な文書を、富山の薬売りは大切な薬を柳行李に入れて運びました。こうして特産品として全国に知られるようになった柳行李は、豊岡ブランドの先駆けともいえるでしょう。

現在は象牙色の木肌の美しさから工芸品としての価値も高まっています。この柳行李の製作技術が、現在の豊岡鞆(かばん)へ脈々と受け継がれているのです。



コリヤナギ(ヤナギ科)  
Salix Koriyanagi Kimura

水辺に生育する落葉低木。一般的な柳のイメージと異なり、株が立ち上がる。現在は、ほとんどが栽培によるもの。高さ2~3m。皮を取り去って柳行李を作る。コリヤナギは、これがつまった名前である。

絶滅の危機に瀕しましたコウノトリが、昭和31(1956)年に特別天然記念物に指定されたのち、再び野生へと復帰する試みが始まったことはご存知の通りです。

このように、わずか100年の間にコウノトリの価値はめまぐるしい上昇と下降を繰り返しました。時代によって、そして人間の思惑によって、自然現象に対する価値とはかくも大きく振幅するのです(その意味で、野生復帰をめざす郷公園の取組とは、特別天然記念物として保護すべき鳥から、究極的にはどこにでもいる鳥にするという、ある意味では価値の下降をめざす試みなのかもしれません)。

**長**い歴史の中で、私たちは、周囲の自然環境と共生していくことの重要性を理解し始めています。私たちの周りには、まだまだ私たちが意識していない自然環境がたくさん残っています。こうした「知られざる」自然環境を発掘し、ヒトと適切につないでいくこと、そして共生という新しい価値観を社会全体で共有できるように、人と人をつなぐことが必要です。そのために大事なことは、過去のありさまを知り、現在の問題としてとらえなおし、未来へと引き継いでいく— 時間軸をまたがった行動ではないでしょうか。

筆者が歴史考古学を専門とするため、過去の話ばかりになりましたが、研究部にはほかに、現在の地域コミュニティのありようを考える地域社会学や、未来をみすえたまちづくりに取り組む地域計画学の専門家が所属しています。過去・現在・未来にわたって、自然環境とヒトをつなぎ、人と人をつなぐ私たちの活動にぜひご期待ください。

天然記念物\* 大正8年に制定された「史蹟名勝天然記念物保存法」に基づき、当時はこのように表記していました。

ごしています。風の強い日は、その吹いてくる方向に頭を向け、風をやり過ごしています。その様子は「風見鶏」のようです。

**Q** | 辺り一面が雪のとき、えさはどこで見つけるのですか？

**A** | 川や用水路などで餌を探します。土手に隠れているザリガニなどを掘り出すこともあります。これからコウノトリは、繁殖のための大切な時期を迎えます。造巢(ぞうそう)、マウンティング、交尾、抱卵などの行動が見られたら、距離を保って観察してください。



冬の間、コウノトリはどしゃぶりで生きてくぞろい。

郷公園・県立大学大学院のスタッフが平成26年の印象に残ったニュースを選出しました。得票数が多かったものから順にご紹介します。



## 大学院開設

1

4月1日、園内に兵庫県立大学大学院「地域資源マネジメント研究科」が開設されました。但馬地域初の大学院で、10人の院生が入学しました。6月17日には開学記念式典を開催し、11月末には大学院棟と郷公園管理研究棟をつなぐ渡り廊下も完成しました。

## 秋篠宮殿下、眞子様お成り

2

7月18日、コウノトリ未来・国際かいぎに御臨席の秋篠宮殿下と眞子内親王殿下が大学院と郷公園にお成りされ、大学院生との御交流の後、山岸園長の説明のもと、コウノトリを御覧になりました。眞子様のコウノトリ御見学は初めてのことです。

## 韓国へ渡ったコウノトリ、初めて発見される

3

豊岡の伊豆巣塔で巣立ったメス1羽が3月18日、韓国 金海市で確認されました。2005年の初放鳥以来、日本のコウノトリが国外で確認されたのは初めてのことです。これに伴い、韓国との共同研究も活発化しています。



## 第5回 コウノトリ未来・ 国際かいぎ開催

7月19日、20日 秋篠宮殿下・眞子内親王殿下ご臨席のもと、第5回コウノトリ未来・国際かいぎを開催しました。山岸園長の経過報告、江崎研究部長の講演の他、ドイツ・韓国の研究者による報告などもあり、様々な意見交換がなされました。

山岸園長の経過報告、江崎研究部長の講演の他、ドイツ・韓国の研究者による報告などもあり、様々な意見交換がなされました。

4位は同数  
4

## 福井県でコウノトリのヒナ誕生

6月14日、福井県で待望のヒナが誕生しました。今年も産卵はありましたが無精卵だったため、共同研究の一環として郷公園から有精卵を移送し、ペアへの托卵によりヒナが誕生。福井県でのヒナ誕生は50年ぶりとなるできごとでした。(関連記事=1頁)



## キコニアレター創刊!

6

## 特別公開大盛況

7

## 山陰海岸ジオパークが 世界ジオパークに再認定

8

世界ジオパーク認定後、初めてとなる再審査があり、9月23日に世界ジオパークとして再認定が決定しました。



## J0405が負傷

9

野生個体「エヒメ」とペアになり、郷公園内の人工巣塔で繁殖を続けていたJ0405♂が、8月に翼を負傷し、飼育下に入りました。



## IPPM-OWSが本格始動

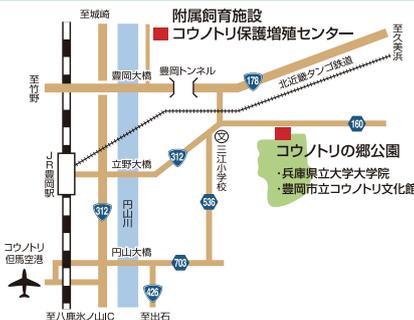
10

IPPM-OWSとは、「Inter-institutional Panel on Population Management of the Oriental White Stork」の略称  
域外・域内のコウノトリ個体群を管理する機関・施設からなる組織です。



## ACCESS!

- ◎神戸から[約2時間30分]  
姫路から[約2時間]  
最寄りIC(北近畿豊岡自動車道)  
八鹿氷ノ山ICから40分
- ◎JR山陰本線「豊岡駅」から約4.5km  
全但バス(コウノトリの郷公園・法花寺・下の宮行き)
- ◎コウノトリ但馬空港から約1.2km



## 編集後記

本年度から、表題とデザインの刷新、内容の工夫を行い、読者の皆様と郷公園をつなぐ橋渡しとなるよう努め、年4回発行することができました。多くの皆様のご意見やご感想を頂いた賜物であると編集部一同、感謝し喜んでいきます。これからも世代を超えて愛されるキコニアレターにしていきたいと張り切っています。

(総務課 城本利明)



# 兵庫県立コウノトリの郷公園

Hyogo Park of the Oriental White Stork  
〒668-0814 豊岡市祥雲寺字ニヶ谷128番地  
TEL. 0796-23-5666  
FAX. 0796-23-6538

26教②-031A4

e-mail: kounotori@stork.u-hyogo.ac.jp

ホームページ: http://www.stork.u-hyogo.ac.jp

開園時間: 9:00~17:00

休園日: 毎週月曜日(休日に当たるときはその翌日)・12月28日~1月4日